

大学運動部員の潜在的目上迎合性と先輩による他者評定の関係

藤 田 勉*

(2012年10月23日 受理)

The relationship between implicit ingratiation with superiors of university athlete and other evaluation by
ahead of them

FUJITA Tsutomu

要約

本研究の目的は、大学運動部員を対象として潜在的目上迎合性と先輩による他者評定の関係を明らかにすることであった。研究の対象は大学運動部員であった。研究の方法は、2年生と3年生に潜在的目上迎合性を測定するための潜在連合テストを実施し、質問紙では顕在的目上迎合性に関する項目を自己報告した。他者評定については、3年生は2年生を、4年生は2年生と3年生の目上迎合性を評定した。潜在連合テストの結果をDスコアに換算した後、顕在的目上迎合性、先輩による他者評定の相関関係を分析した。その結果、顕在的目上迎合性（自己報告）と潜在的目上迎合性にはほぼ無相関であったが、顕在的目上迎合性と先輩による他者評定は弱い正の相関、潜在的目上迎合性と先輩による他者評定も弱い正の相関であった。この結果は、自己報告に頼らない潜在指標が他者評定という客観的指標を予測する可能性を示唆するものであった。

キーワード：潜在連合テスト，ライフスキル，社会的スキル，スポーツ，体育

* 鹿児島大学教育学部 准教授

はじめに

スポーツの競技力を高めるためには個人の才能や努力以外にも運動部員間の良好な人間関係が築かれているか否かが重要になる。運動部員間の人間関係には、リーダーと成員の関係、成員間の関係など様々なものが考えられるが、先輩と後輩の関係も部を運営していくあるいはチームの競技成績を向上させていく上で1つの重要な研究テーマになると考える。例えば、運動部活動からの離脱の原因を調査した青木(1989)や稲地・千駄(1992)の研究では人間関係の軋轢や部機能の低下が挙げられている。これらの原因の1つとして先輩と後輩の関係も関与している可能性は否定できない。

スポーツ心理学における人間関係に関連する研究テーマには、集団凝集性、社会的スキル、ライフスキルなどがある。集団凝集性では集団メンバーのまとまりについて課題凝集と社会凝集に分けられ、特に社会凝集は選手同士や選手と指導者との関わりの満足度から人間関係を示す(杉山, 2012)。また、社会的スキルはコミュニケーションスキル、対人スキル、主張スキルといったライフスキルの一部に位置づけられ、ライフスキルにはそれら社会的スキルに加えて、意思決定、問題解決、創造的思考、批判的試行、自己意識、共感性、情動への対処、ストレスへの対処が含まれる(上野, 2012)。これらの研究では、人間関係を様々な観点から分析しているが、所属している運動部全体を評価する、あるいは相手を限定しない個人の対人的スキルの評価といった抽象的な人間関係であり、先輩と後輩の関係といった対象を限定した直接的な人間関係を検討するものではない。

そこで本研究は運動部における先輩と後輩の関係を検討してみたい。先輩と後輩の関係性をあらかず概念として目上迎合性がある。岡部ら(2004)は、企業における組織的違反や不正に関する心理的特徴を測定するという応用場面を考慮し、属人的判断傾向の定義における提案者の属性や自分との関係に着目し、その中でも「目上・目下」という上下関係に焦点を当て、「目上に従う」という認知傾向を目上迎合性と定義した。そして、その目上迎合性を測定するためには、組織構成員の無意識的で自動的且つ直観的な情報処理過程である潜在モードの心理的特性を理解することが重要であるとの指摘から、潜在モードの心理的特徴を測定する手法である潜在連合テスト(IAT, Implicit Association Test)によって潜在的目上迎合性を測定した。

IATは、Greenwald et al. (1998)によって開発された意識では統制できない測定法であり、質問紙における社会的望ましさなどのバイアスを排除できるテストとして注目されている。IATで測定されるデータは潜在指標と呼ばれ、これを受けて、従来の手法である質問紙で測定されるデータは顕在指標と呼ばれるようになった。

IATの特徴の1つとして、他者評定と有意な相関を示すことが挙げられる。例えば、藤井・上渕(2010)は潜在的知能観と他者評定状態不安、また、相川・藤井(2011)は潜在的シャイネスと他者評定シャイネス及び他者評定対人緊張に相関関係があったことを報告している。運動部内の人間関係、特に先輩と後輩の関係を明らかにすることは、少し踏み込んだ関係性を調査するこ

とになるため、潜在指標による測定は有効ではないかと考える。

そこで本研究では、運動部に所属する大学生を対象として、後輩と先輩の関係について、後輩の目上迎合性に着目し、その目上迎合性の顕在指標と潜在指標が先輩による他者評定とどう関係しているのかを明らかにする。具体的には、大学2年生あるいは3年生の目上迎合性について質問紙による自己報告と IAT からデータを収集して、大学3年生あるいは4年生からは後輩の先輩に対する目上迎合性の他者評定のデータを質問紙で収集して、両者の相関関係を検討する。

研究方法

1) 対象者と方法

運動部活動に所属する大学2年生8名、3年生5名、4年生10名であった。所属部活動の種目は、バレーボール、サッカー、野球、バスケットボール、陸上競技、ラグビー等であった。2年生と3年生は質問紙による先輩に対する態度の自己報告と IAT による潜在的目上迎合性を測定した。3年生と4年生は2年生あるいは3年生の先輩に対する態度を質問紙で他者評定した。

3年生は2年生の先輩であり、4年生の後輩であるため、自己報告と他者評定の両方を実施した。3年生あるいは4年生が他者評定する対象は所属部活動の後輩に限定した。したがって、3年生には、自己報告のみを行った者、自己報告と他者評定の両方を実施した者がいる。また、同じ部に複数の後輩がいる場合は、3年生が複数の2年生を、あるいは4年生が複数の2年生又は3年生を他者評定している。

2) 質問紙

2年生と3年生が回答した先輩に対する態度の自己報告は、上野（2007）のライフスキルに対する信念尺度の中から礼儀尺度の1項目（「礼儀を重んじることは日常生活においても非常に大切である」）と島本・石井（2005）の日常生活スキル尺度の中から対人マナー尺度の1項目（「目上の人の前では礼儀正しく振舞うことができる」）を使用した。この2項目を選定した理由は、言葉遣いだけではなく包括的な先輩に対する態度であると考えたためである。

3年生と4年生による他者評定は自己報告の項目に倣って作成した。具体的には、「～君（さん）は、礼儀を重んじることを非常に大切にしている」、「～君（さん）は、目上の人の前で礼儀正しく振舞うことができる」というものであった。実際の調査票には、「～君（さん）」のところに実名をあらかじめ調査者が記入した。

3) 潜在連合テスト

潜在的目上迎合性は潜在連合テスト（IAT, Implicit Association Test）により測定した。IATには、岡部ほか（2004）の目上迎合性 IAT の刺激をそのまま使用した（表1）。IATの実施にはノート型パソコンを使用し、実験プログラムは久本・関口（2012）によって作成されたエクセルのマク

ロプログラムを使用した。

IAT では、パソコンの画面上の左右に2つあるいは4つの属性を示す文字があらかじめ呈示されており、実験プログラム開始後、画面の中央に次々に呈示される刺激語が左右どちらの属性に分類されるかをキーボードで反応する。

本研究で実施した実験プログラムは7ブロックある。第4ブロックと第7ブロックは40試行となっており、その他のブロックは全て20試行となっている。ブロックごとに左右に呈示されている刺激語が2つになることや4つになることがある。また、刺激語の位置が左右入れ替わるブロックがある。

被験者は、パソコン実習室に入室後、パソコンが設置してある席に座り、実験者よりパソコン操作の説明を受けた。各席の間隔はパソコンの操作内容が隣席の被験者に見えないくらいであった。IAT 実施の具体的な説明は実験プログラム中に組み込まれているため、被験者は各自で IAT を実施した。実験途中に操作に大きく戸惑う被験者はいなかった。

表1. 目上迎合性IATに用いた刺激リスト(岡部ほか, 2004より)

カテゴリ	目上	目下	賛成	反対
刺激	先輩	後輩	協力する	さからう
	上司	部下	同意する	抵抗する
	年上	年下	あわせる	そむく
	上級生	下級生	支持する	反発する
			したがう	はむかう

結果

1) 基本統計量と相関行列

顕在的目上迎合性(自己報告)、潜在的目上迎合性(目上迎合性 IAT)、先輩による他者評定の平均値、標準偏差、相関行列を表2に示した。目上迎合性 IAT の値には、久本・関口(2012)に紹介されている D スコアによって算出した。他者評定は3年生が2年生を評定した値と4年生が3年生及び2年生を評定した値である。

基本統計量を見ると、顕在的目上迎合性と他者評定は5段階評定にも関わらず、平均値が4.50前後であり、高い水準で自己報告と他者評定がなされている。最小値も3.00あるいは4.00と高かった。歪度については、他者評定は-1.00を下回り、尖度も1.00を超えているというかなり高得点に分布が偏っていた。顕在的目上迎合性の歪度と尖度は極端な値ではないが、最小値と最大値の範囲が1.00という極めて狭い範囲の得点分布であった。

相関行列を見ると、顕在的目上迎合性は他者評定と弱い正の相関($r=0.38$)であったのに対して、潜在的目上迎合性と他者評定は中程度の正の相関($r=0.50$)であった。顕在的目上迎合性と潜在的目上迎合性は弱い正の相関($r=0.30$)であった(表2)。

表2. 基本統計量と相関行列

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	歪度	尖度	1)	2)	3)
1) 顕在的目上迎合性	4.43	0.35	4.00	5.00	0.18	-0.75	—		
2) 潜在的目上迎合性	0.42	0.26	-0.04	0.94	-0.17	-0.17	0.30	—	
3) 他者評定	4.63	0.59	3.00	5.00	-1.48	1.34	0.38	0.50	—

2) 学年差

各変数について、2年生と3年生の平均値の差をt検定により検討したところ、いずれの変数も有意な差は示されなかった。ここでも、両群共に、平均値が高く、標準偏差も基本統計量と同程度であった(表3)。

表3. 各変数の学年差

	2年生		3年生		t値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1) 顕在的目上迎合性	4.50	0.32	4.29	0.39	1.39	n.s
2) 潜在的目上迎合性	0.38	0.27	0.52	0.22	-1.16	n.s
3) 他者評定	4.69	0.63	4.50	0.50	0.70	n.s

考察

本研究は、大学運動部員を対象として、後輩の目上迎合性と先輩による他者評定の関係について、目上迎合性は質問紙で測定する顕在的目上迎合性と潜在連合テストで測定する潜在的目上迎合性から検討した。

学年差の検討では、顕在的目上迎合性、潜在的目上迎合性、他者評定のいずれの変数にも有意な差は見られなかった。これは、2年生は3年生あるいは4年生に対して、3年生は4年生に対して示す目上迎合性に違いはないこと、また、4年生が他者評定した2年生及び3年生の目上迎合性と、3年生が他者評定した2年生の目上迎合性に違いはないことを示している。

各変数間の相関関係では、顕在的目上迎合性と潜在的目上迎合性の相関、顕在的目上迎合性と他者評定の相関は、弱い正の値であった。それに対して、潜在的目上迎合性と他者評定の相関は中程度の正の値であった。これらのことは、自己報告であっても潜在指標であっても他者評定との関連は見られるが、潜在指標の方が自己報告よりも他者評定と強い関連があることを意味している。

潮村(2008)は、顕在指標と潜在指標の関係について、相関が高いテーマ(例えば、「米国の大統領選挙の候補者に対する好み」)は自身の態度を公表しても一般には問題がないと考えられるテーマであるのに対して、相関が低いテーマは、一般的には自身の態度を直接的に表出することがはばかれるテーマであると考察している。このことからすれば、目上迎合性というのは自

己報告では回答し難い内容なのかもしれない。

しかしながら、厳密に言えば、本研究で指標した顕在的目上迎合性は先輩に対する礼儀や態度に関する項目である。潜在的目上迎合性が先輩に賛成する程度を測定するものであることからすれば、顕在的目上迎合性と潜在的目上迎合性の相関は低くて当然かもしれない。むしろ、潜在的目上迎合性が他者評定と中程度の正の相関が示されたことは、他者評定が後輩の礼儀や態度というよりも先輩に従う程度として評定されていた可能性を示唆しており、後輩と先輩の対人関係は、それぞれが異なる視点で評価をしているのではないかと思われる。

藤井・上渕(2010)や相川・藤井(2011)のような状態不安の他者評定は対象者の行動の特徴あるいは心理的な特徴を評価するものであるが、目上迎合性の場合、先輩による他者評定は純粹に後輩の特徴のみの評価に限らず、対象となる後輩に好意的態度があるか否かで回答が歪むのかもしれない。すなわち、目上迎合性の場合には他者評定にもバイアスがかかる可能性は否めない。しかしながら、本研究で潜在的目上迎合性と他者評定にある程度の相関が示されたことは価値があることと考える。例えば、潜在的目上迎合性と他者評定の相関が強いチームと弱いチームがあるとすれば、それは集団を評価する様々な変数(例えば、集団凝集性、集会的効力感など)を規定するあるいは調整する可能性がある。目上迎合性に限ったことではないが、集団内の人間関係を質問紙で評価するときには社会的望ましさが働くことがある。また、他者を評価するという視点から質問紙調査を実施すること自体を受け入れてくれない対象者もいる。そのような問題を克服するための手法の1つとして潜在指標は有用であると考えられる。

文献

- 相川充・藤井勉(2011). 潜在連合テスト(IAT)を用いた潜在的シャイネス測定を試み. 心理学研究, 82, 41-48.
- 藤井勉・上渕寿(2010). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討. 教育心理学研究, 58, 263-274.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K.(1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- 久本博行・関口理久子(2012). やさしいExcelで心理学実験. 培風館.
- 岡部康成・今野裕之・岡本浩一(2004). 潜在的「目上迎合性」の測定ツールの開発. 社会技術研究論文集, 2, 370-378.
- 潮村公弘(2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性. 下斗米淳編 自己心理学6 社会心理学へのアプローチ. 金子書房: pp. 48-62.
- 杉山佳生(2012). スポーツと集団2集団凝集性一チームのまとまり. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編著 よくわかるスポーツ心理学. ミルヴァ書房: pp. 94-95.
- 上野耕平(2007). 運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得. 体育学研究, 52, 49-60.
- 上野耕平(2012). スポーツによる社会化. 杉原隆編 生涯スポーツの心理学. 福村出版: pp. 89-99.